

『この方を見なさい』

使徒の働き 26章 1～23節

◆パウロの喜び

【1-3節】先週確認したように、パウロとアグリッパ王の会見は総督フェストの開会の言葉によって始まりました。25章24-27節でフェストは「パウロをローマに送る訴状作りのためである」と、この会見の意味と目的を明らかにしています。そして1節でこの会見の主導権はアグリッパ王に委譲され、パウロに対して【あなたは、自分の言い分を申し述べてよろしい】と許可が出ます。これを受けて【パウロは、手を差し伸べて弁明し始め】ました。“手を差し伸べて”と訳されている言葉は、13章16節、21章40節では“手を振って”語りだしたと訳される言葉です。静粛と注目を促す振る舞いですが、今回は、これから話す内容に注意深く耳を傾けてほしいと言うパウロの願いがこもった仕草と言えるでしょう。

パウロは王への挨拶から始めます。【きょう、あなたの前で弁明できることを、幸いに存じます】。アグリッパ王の前で弁明できることを喜んでいるということです。なぜパウロは喜んでいるのでしょうか？弁明すれば無罪を勝ち取り釈放されると考えたからでしょうか。決してそうではないことを、私たちはこれまでのパウロの言動から知っています。パウロは喜びの理由を3節でこう述べました。【特に、あなたがユダヤ人の慣習や問題に精通しておられるからです】と。“ユダヤ人の慣習や問題”とはまさにこれまでのパウロの裁判の中心点です。つまりユダヤの王の前で「ユダヤ人が大切にしている律法(旧約聖書)とあのナザレのイエスとの関係」を説明できるから幸いであるとパウロは喜んでいるのです。イエス・キリストの福音を証しできることをパウロは喜んでいるのです。

◆悔い改めから始まる

4節からパウロの弁明内容です。【4-5節】パウロはユダヤ人として厳格な教育を受けて育ち、とりわけ律法に対して厳格なパリサイ派の律法学者として生活してきたことを強調することで、この度の裁判との繋がりを説明しています。【6-7節】パウロは、神が私たちの先祖に約束されたものを待ち望んでいることで、イスラエルの希望にのことで訴えられて裁判を受けていると説明しました。【神が私たちの先祖に約束されたもの】＝イスラエルが待望していたこととは何でしょうか？【8節】それは死者の復活であるとパウロは続けます。しかしイスラエルの民が待望していた神の約束とは、イスラエルを再興する真の王、救い主の出現だった筈です。【イザヤ書9章6-7節】アブラハム、イサク、ヤコブに連なるイスラエル民族はエジプトでの苦難を経てモーセの下で神による救いを経験します。荒野において神との契約・律法が与えられ、幕屋礼拝を通してイスラエルは神の救いの民という選民思想が育まれてゆきました。その後もイスラエルには常にリーダーが与えられます。しかしダビデ王、ソロモン王亡き後、イスラエルは分裂して衰退の一途を辿ります。アッシリヤ、バビロンによって滅ぼされ、かろうじてエルサレムだけ守られたもののペルシアそしてローマの支配下に置かれました。ユダヤ人は絶えずイスラエルを再興する王・メシアを待望していた筈です。にも拘らず、ローマ帝国支配下における当時、大祭司、祭司長、律法学者の権限は増幅し、聖書の教えも形骸化して行きました。派閥とその指導者の権力の下、霊的盲目に陥ったユダヤ人たちはイスラエルを再興して暗闇から救い出す真の王、救い主が来られるという希望に蓋を閉じたのです。テキストに戻りましょう。

パウロが自己紹介からユダヤ人の希望である死者の復活へと繋げた弁明、それは紛れもなくあの十字架から復活されたナザレのイエスに目を向けるべきであると証ししているのです。パウロは本題に入ります。【9-11節】かつての自分は厳格なパリサイ派律法学者であり【ナザレ人イエスの名に強硬に敵対すべきだと考え】多くのキリスト者を迫害したこ

とを証しします。【12-15節】ダマスコへの途上、パウロは復活のイエス様と出会いました。【14節 とげのついた棒をけるのは、あなたにとって痛いことだ】というイエス様の言葉はこの箇所にはかない興味深い表現です。イエスとイエスを信じるキリスト者は「とげのついた棒」であると蹴りつけていた(迫害していた)ことはパウロにとって痛いことであるという意味です。復活のイエス様との出会いによって、イエス様とキリスト者を痛めつけながら自らが痛んでいたという自らの罪を示され、パウロは悔い改めに導かれたのです。イエス様を迫害することは自分にとって痛いことであると気付くとき、その罪を悔い改めるべきであるというパウロのメッセージです。私たちが復活のイエス様に目を留めるとき、最初に示されることは主の前に罪人であるという痛みであり、その罪を悔い改めるということに他ならないのです。

◆ すべての者に与えられる光

続いてパウロは、新しい約束を弁明しています。【16-17節】イエス様はパウロに召命、役割を与えました。「もう足を傷つけることを辞め、その足で立ってイエス様の奉仕者、証人として歩きなさい」と伝道者に任命されたのです。そしてイエス様は、パウロを【この民と異邦人との中からあなたを救い出し、彼らのところに遣わす】と約束されました。イエス様には目的がありました。【18節】“彼らの目を開いて”という“彼ら”とは、この民(ユダヤ人)と異邦人です。すなわち「ユダヤ人のみならず全ての者の目を開いて、暗闇(サタンの支配)から光(神)に立ち返らせるため、イエス・キリストを信じる信仰によって全ての人に罪の赦しを与え、聖なる者とされた人々と共に御国を受け継がせる(真のイスラエルの民とする)ため」にパウロ(あなた)を遣わすとイエス様は約束されたのです。ここには福音の本質が凝縮されています。ここで重要な事柄は、【彼ら(ユダヤ人と異邦人)】を対象とされていることです。ユダヤ人限定ではなく異邦人もすべての者の救いのためにパウロを遣わすと主は言われたのです。そしてそれは閉ざされた目を開き、暗闇から光の中に、すなわちサタンの支配から神が支配する場所へと人々を導くためであるとイエス様は仰ったのです。すべての者の目を開き、光の中へと導き、キリストへの信仰によって罪を赦し救いへと導くというこの福音の本質こそ、ユダヤ人のアキレス腱でありました。「我々こそ選ばれた神の民である」とイエスを十字架に掛けたユダヤ人にとって、そのイエスの前に罪を悔い改めること、そして異邦人も救いの民に入れられるという福音は怒りの要素でしかあり得ませんでした。

神の前に罪人であることが示されて罪を悔い改める時、ユダヤ人であろうと異邦人であろうとすべての者がイエス・キリストにある信仰によって罪赦され、救いの民とされるのです。罪という暗闇ではなく、神と共に光の中を歩むことが出来るのです。これこそが私たちに与えられている福音の本質であり、パウロはそのために伝道者として召されたのでありました。パウロは今、囚われの身であっても光の中を歩むキリストの証人として、喜んでイエス様を証ししているのです。

◆ まとめ・お勧め

最後にパウロはアグリッパ王に語りかけます。【19-23節】「イエス・キリストの前に罪を悔い改めれば、全ての者が救われると伝えてきました。そのためにユダヤ人から憎まれ殺されそうになりましたが、私は主に守られてこうして証しできるのです。そしてこの福音こそ、預言者やモーセが聖書で預言してきたことなのです」すなわち「イエス・キリストが十字架で死なれ、三日目に復活されたことにより罪の赦しと救いがあるという光を、私は全ての者に伝えるのです」とパウロは語りました。

私たちはイエス様の十字架と復活によって光の中を歩むことが出来ます。今こそ、イエス様を心に受け入れて歩んで頂きたいのです。イエス様の福音はあなたのために開かれた福音です。